
ドルアーガの冒険

まあしい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドルアーガの冒険

【Nコード】

N4525Y

【作者名】

まあしい

【あらすじ】

はじめまして「まあしい」です。この作品は某MMOの世界を舞台にした異世界小説（にする予定）です。初作品なので、深く考えずにのんびりやりたいと思います。個人的好みにより、某有名ファンタジー小説の登場人物に似た人々もそのうち出たりしますが、スルーしていただければありがたいです。（不快に思うファンの方は読了をお勧めします）更新は、作者が仕事をしている関係で不定期となりますのでご了承ください。出来るだけ週に1〜2回は更新したいと思っています。主人公は、元の世界へ戻るために仲間たちと

冒険をしますが、仲間のキャラが強くなりそうなのでどこまで主人公が輝けるのかは不明（不安）です。少しでもお楽しみいただければ幸いです。

1 物語のはじまり（前書き）

初作品です。あたたかい目で見てやってください。 m | | m

1 物語のはじまり

1 物語のはじまり

「ふう。仕事の後のビールはうまいなあ。」

今の時間は10時半を少し回ったところ。

菓子の卸問屋で営業をする俺はビールを片手にコンビニで買った弁当を食べる。

職場でも中堅となった俺は、得意先まわりはもちろんのこと、後輩の指導や書類整理までこなしておりなかなか忙しい。

やっとお腹を満たし、軽くシャワーを浴びた俺は、PCにむかいゲームを始める。

もう、3年以上続けているネットゲーム THE ONLINE
RPG ドルアーガの塔 the Aegis of URUK
だ。

ネットで見た関連アニメに釣られてやった初めてのMMOゲーム。

基本無料ということもあり、やってみると最初の頃はレベルも簡単に上がって楽しめたので嵌ってしまった。

攻略サイトを見ると同じ戦闘職であるスカウトの方が有利だとの説明もあったがソルジャーにした。

理由は、ドルアーガの世界で ベルセルク の ガッツ をやりたかったから。まあ、お子様的な発想だ。

ソルジャーはガッツ愛用の両手剣を使えるのと同時に、2次職でベルセルクへ転職できる。

それに、よく見ると同じような考えのガッツに似たプレイヤーもいたりしたのだ。

ゲームはレベルアップとともにやれるスキルも増えたり面白くなっていったが、Lv20を越えたあたりから無課金でプレイするのが大変になってきた。

多少の金もあつたので課金できないわけではなかったが、どこか意地になって無課金でプレイしていた。

それでも、カンストが多数いる大手ギルドに誘ってもらい、仲間の支援を受けながらやっとなクエストをクリアしてベルセルクに転職することができた。

目標のベルセルクとなり、俺としてはそこでやめてもよかったのだが、ギルドの仲間にお世話になった分を少しでも返せればと思い、フレや他のメンバーのクエストをサポートしたりして細々と続けていた。

最近の仕事の忙しさから、週末だけどころか1ヶ月以上間をおいたINも珍しくないが、ベルセルクがLv50で装備できる両手剣のためにこつこつソロでプレイしている。

その両手剣とはクレイモア。そう、ジャンプ系で連載しているク

レイモア が想像できる大型の両手剣。

あの漫画も好きなのだよ。まあ、ただの自己満足ではあるが小さな目標は大切なのだ。

そこで、不遇のLv49ベルセルクである俺は、今日も格下のモンスターをストレス解消もかねてこつこつと狩っていたのであったが、安全地帯で回復中に仕事の疲れからか、いつもの寝才子状態へと陥るのだった。

『ああ、また寝ちまった。』

俺は目をこすりながらPCを見ようとした。

『何だここは…。』

俺がいたのは自分の部屋ではなかった。どこかの町の一角に座り込んでいたのだ。

そして、周りにいる人々はどう見ても日本人には見えない人ばかりだ。

西欧風の神官や皮鎧を付けた男女、魔道士のようなローブをまとった人。

座っていたのは広場で、周りをよく見ると建物の形や配置に何となく見覚えがある…。

広場の中心部には光り輝く魔方陣で巨大な岩が浮いており、町の外れには神々しい雰囲気を持った神殿見える。

俺の記憶が確かならば、ここはラジャフ村なのか…。

それはドルアーガのプレイヤーにとってはじまりの村。

ありえね〜。どうやらここはドルアーガがそれに近い世界らしい。

俺は厨二かつ！

『…そうか。ゲームをしながら寝ちまったからその夢を見てるんだな。』

俺は、夢の途中でその世界が夢であることを認識して楽しむということは何度が経験している。

自分のイメージを夢で具現化し、鳥になったように空を飛んで遊覧飛行などをするのは楽しいものだ。

そのため、また夢の世界で遊んでみるかと軽い気持ちになった。

『最近、ログ・ホラとか異世界ものの小説をネットでよく読んでいたからこの夢を見たのかなあ。』

自分の装備を確かめるとフルプレートアーマーに両手剣を持っており、寝オチした時の装備を身につけているらしいことが分かる。

『ここから初期状態の装備だと悲しいからなあ。そう言えば、俺はどんな顔なんだ?』

近くの水辺に行つて自分の顔を見ると、かなりワイルドなイケメン顔があらわれた。

『おお、ガッツだ。傷がない若い頃のガッツの顔じゃないか。』

いい感じだ。この顔ならリアルでモテナイ俺でもモテソウナキガスル。

でも、この状態で俺は何が出来るんだろう。他の異世界設定ではウインドウが開いたりしたけど…。

・・・開いたよウインドウ。

思考を集中すると視界の上のほうに半透明で表示されるんだ。

さすがに俺の夢だけあるわ、うん。

そこで俺はシステムウインドウでアイテムと装備を確認する。

中身は赤と黒が印象的なデザインのLv40鎧(強化版)だが、幻想装備であるアニメでウトウが装備している鎧を纏っているため、外観はグレーの無骨なフルプレートメイルに見える。

アイテムは格下モンスター狩りの途中だったのであまりたいしたものが入っていない。

布系とか糸がメイン。しょぼいな。

回復ポジションは多少あるけど特別なヤツじゃないし。

まあ、手元に50銀ぐらいはあるから問題ないな。

ステータスを確認すると、性別も職業も以前と同じだが名前がガッツ変わっていた。

名前は変えられないはずなのにガッツになっちゃってるよ。うれし
いかも（^^）

それに、ここがラジャフ村だとすると近場には強いモンスターいな
いし、戦えば無双状態だ。

様子を見る時は弱いやつからが基本とくれば、バビリム街道に向か
えばいいよな。

Lv1のネズミ狩りといきますか。

中央の広場を通り過ぎてバビリム街道へ歩くのだが、思ったよりも
距離がある。

ゲームよりも村の建物がかなり増えているようだ。

ゲームで見た建物だけじゃ村の生活が維持できないもんなあ。

その分、村が全体的に広くなってるんだ、よくできてるもんだよな
あ。

俺は村の様子を見ながら街道への入り口にいた衛兵に目礼すると、

最弱モンスターのいる街道へ出た。

草原につづく街道を歩いたが、ゲームのようにすぐにはモンスターを見つけれないようだ。

本来だと村にモンスターが近づくことはないのだから本来は容易に出会うものではないのだろう。

それでも、10分ほど街道を歩くと巨大ネズミを発見した。

ゲームで見たおなじみのモンスター スモールラットはカピバラをさらに二周りぐらい大きくしたような感じだ。

プレイヤーが初めて出会うモンスターの一つだ。

しかし、今の私は初心者のところとは違うのだよ、フッフ。

Lv45両手剣（強化版）を振るかざすと、Lv1スモールラットへ上段から真つすぐに振り下ろした。

ズサッ。ドスッ。斜め右から切り下ろした剣は、そのパワーとスピードで予想以上に勢いが付き、スモールラットの肉体を両断した後で地面に突き刺さってしまった。

ネズミくんは小さな断末魔と血飛沫をあげながら昇天し、その身は消えうせた。

モンスターを切った感覚は剣を通して手に残り、一瞬飛び散った血の匂いだけがあたりに漂う。

『本当に夢なのか？匂いがある夢なんて俺は見たこと無いぞ？』

俺が夢を認識する場合、匂いや味が感じられないという経験がある。

五感が正確に働かないことには敏感らしい。

もちろん、この感覚には個人差があるかもしれないが。

その後も何匹かスモールラットやデインギラット、巨大コウモリのブラックフライを軽く一撃で葬ったのだが、やはり血の匂いがした。

俺はここにいたって、初めてこの世界が夢ではないという不安に取り付かれたのだった。

1 物語のはじまり（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

2 ラジャフ村(1)

2 ラジャフ村(1)

本当にこれは夢じゃなくて異世界転移なのか？

かんべんしてくれよw

それに、うろつろした人を見なかったところからすると、転移は俺だけっぽいし。

足早にラジャフに戻った俺は、不安になり人気の無い安全な場所で現状確認をはじめた。

装備はイベントリウィンドウで確認できた。同じく持ち物も確認できるが、どこにあるんだろう？

そういえば背負っていた皮製のナップサックのような荷物袋からは殆ど重さを感じないけどもしかして…。

荷物袋に手を入れて体力回復ポーションをイメージすると、手に堅いものが触れる。

取り出すと見覚えのある赤い液体が入った細長い試験管に似た器だった。

体力回復ポーションだ！これはマジックバックなのか！

イベントリウィンドウを確認するとポーションが一つ減っている。

ドラえもんの四次元ポケットみたいだなあ。

しかし、本当に俺の夢で無いならばかなり困ったものだ。

小説や漫画ではよくあるパターンでも、自分に起こればただの悪夢でしかない。

だってそうだろう？

世界一安全で平和な日本からくらべると、剣と魔法の世界は危険が多すぎる。

だから創作世界の主人公たちはかなりチートな設定が認められていた。

その時は神様の人がチートな望みを聞いてくれたようだったが俺には無いのだろうか？

……無いらしい。

目覚めてから体感で2〜3時間は経過しているはずだ。

これだけ時間が過ぎても反応がないんじゃないじゃそのパターンは無しか。

辺りを見ると空が薄暗くなり、夕闇が迫ってきているのがわかる。

野宿はごめんなので宿を探すことにする。

そういえば、ラジャフには宿屋が1軒あったと思うが？

中央の広場から東側に伸びる放射状の道を歩くと、職人たちがにぎわう通りで30歳ぐらいに見えるそばけた顔の男が呼び込みをしていた。

「おいしい食事と安らかな睡眠を約束する夢屋の宿だよ！ラジャフ1番の宿はいかが〜！」

あれは宿屋の若旦那、アドナーンか？

クエストに関係していたNPCだが、もし依頼があっても今はスルーして泊まろう。

「宿に泊まりたいんだが？個室で1泊いくらだ？」

「1泊なら20銅、朝と夜の食事付なら26銅だ。」

1銅が100円〜200円というところか？

懐はまだ暖かいのでその程度なら問題ない。

「食事付で頼む。」

「よしてきた！お一人様ご案内！個室で食事付だよ〜！」

大きなログハウス風の宿に入る、外観もそうだが思っていたよりもかなり広いようだ。

「いらつしゃい！若女将のアイリーンと申します。部屋は2階の奥の1番になります。食事はすぐにめし上がりますか？」

20代前半と見えるかわいらしい顔の女性が迎えてくれた。

やるなアドナーン、うらやましいぞ。

「ガッツだ。部屋に荷物を置いたら食事を取りたい。とりあえず2泊はするつもりだ。」

「ありがとうございますガッツさま。2泊だとサービスさせていただいて50銅になります。階段の横におけと水がありますのでお使いください。」

金を払って鍵を預かると、俺は水をはった木のおけを持って部屋に向かった。

部屋の鍵を開けて中に入ると縦長の6畳ほどの広さだった。

右側にベットがあり、左側にはちいさなテーブルと木の椅子がある。

先ほど使った部屋の鍵は簡易なものようだったので貴重品は部屋に置きそうもない。

まあ、マジックバックがあるからその必要はないが。

バッグからコットンの布を出すと、俺はたらいで顔や手足を洗い、布でふきあげてさっぱりする。

食事をするのに全身鎧はつらいので、バッグの皮鎧に着替えると、念のためシヨートソードを腰に差した俺はバッグを背に1階の食堂へ降りていく。

空いているカウンター席に腰を下ろすと若女将のアイリーンが注文を取りに来た。

「今日のメニューは、イートラットの煮込みかベジタブルバットの姿焼きになりますがどちらにしますか？」

「……俺にネズミかコウモリか、どちらかを選べというのか。

やっぱり悪夢じゃないのかこれ？」

イートとかベジタブルとか、記憶しているモンスターの名前とは違う呼び名をしているから食用のようだが、所詮はネズミとコウモリだろう。

基本的に好き嫌いが無い俺だが、ゲテモノ系は別である。

しかし、俺の記憶ならばカピバラは南米の一部の地域で食用にされているはずだし、コウモリも東南アジアでは食用のものがあったようだ。

俺は勇気を出して聞いてみた。

「今日のおすすめはどっちだ？」

「やっぱり、イートラットの煮込みですかね？しっかり煮込んであるのでおすすめですよ。」

「それでは煮込みをたのむ。」

「わかりました。ラット煮込み1人前入りま〜す！」

食堂で聞き耳を立てながら時間をつぶしていると、10分ぐらいたってから木の器に入った煮込みと木の皿にのった黒パンが運ばれてきた。

「おまちどうさま。イートラットの煮込みです。熱いので気をつけてお召し上がりください。」

あまりおまちしていないかもしれないが…、見た目はポトフのような感じで悪くない。

お腹もすいてきたような気がするので、とりあえずスープを木のスプーンで飲んでみる。

塩が少し薄味だがおいしく感じる。

ニンジンや玉ねぎのような野菜が入っており、うまみも感じるしコクもあるようだ。

次に、思い切ってイートラットの肉を食べると豚肉のような味がする。

かみ締めるとさらに肉の味が口に広がり、しっかりとした歯ごたえが伝わってくる。

十分満足できる味だったので、黒パンと一緒にあっという間に完食した。

食わず嫌いは良くないな、今回はコウモリさんにチャレンジしてみ

るか？

食堂を後にした俺は、カウンターでランプを借りると部屋へ戻った。テーブルにランプを置くと、荷物を窓際に下ろしベッドへ横になる。ベッドはわらの上に毛布を敷いたもので、寝るときにはさらに毛布をかけるようだ。

わらの匂いは、子供の頃に農家の友人のところまで遊んだ頃を思い出させる。

ハイジもこんなベッドに寝ていたのかなあ。

慣れない狩りと異世界の雰囲気に疲れた俺はランプの火を消してねることにした。

詳しい情報収集は明日からしよう。

俺はまぶたを閉じて、元の世界の戻れることを念じながら眠りについた。

3 ラジャフ村(2)

3 ラジャフ村(2)

目覚めると、俺はわらのベッドに寝ていた。

やっぱり夢じゃなかったらしい。

軽い焦燥感を感じながらベッドで今後のことを考える。

昨日の狩りでわかったのだが、モンスターを倒して手に入るアイテムは自動的にマジックバックに入りイベントリで確認できるようだ。

宿代を稼ぐだけなら、この辺のモンスターを狩ったり、簡単なクエストを受けるだけで足りるだろう。

弱いモンスター相手なら剣の耐久もそう簡単には落ちないから、道具屋へメンテナンスに出す費用も頻繁ではない。

しかし、元の世界へ戻るまでにどれぐらいの期間を過ごすことになるのかも見当がつかないので無駄遣いは出来ない。

そこまで考え、お腹がすいてきた俺は、朝食を食べるために食堂へ向うことにした。

「ずいぶんゆっくりしたようですねダンナ。よく寝むれましたか？」

若旦那のアドナーンが声をかけてきた。

「疲れていたのかよく寝たようだ。そんなに長く寝ていたか？」

「日も昇ってけっこうたちますから、他の方は殆ど食事が終わっていますよ。」

田舎の1日は、朝日とともに始まるようだ。

田舎に住む農家のじいちゃんも朝の五時ぐらいから畑に行っていたような気がするしな。

朝食は大きな黒パンとハムのような物にサラダとミルクがついている。

食事をしながら俺は時間について考える。

時計もないし、どうやって時間を確認すればいいのだろうか？

そこで俺は地図のウィンドウの中に時計があったことを思い出した。

地図ウィンドウをイメージすると右上に確認することができ、さらにウィンドウの右上にデジタルで時計が表示されていた。

ゲームでは1分が1秒ぐらいの速さで経過していたが、この世界ではそうではないようだ。

食事を終えて部屋に戻った俺は、念のためフル装備で情報収集のため外へ行くことにした。

宿がある通りは中央の広場から倉庫へ伸びているのだが、ゲームではここに生産用のNPCが並んでいた。

倉庫はアイテムを預けておけるとおけるところで、預けたアイテムは各タウンの倉庫で受け取ることができる。

アイテムの出し入れは倉庫番のNPCに話しかけて行っていたが、この世界ではどうなるのだろうか？

俺は倉庫番の女性、タリアに話しかけた。

「アイテムを取り出したいんだが。」

「ステータスカードをお見せください。」

ステータスカード？何だそれは？

ゲームの世界では無かったものだったので少し困惑する。

そう言えば他の異世界でもそんなシステムがあったしな。

もしあるとすれば…、それはイベントリウインドウの中にある間に入っていた。

俺はバッグにステータスカードをイメージして手をいれ、金属製のカードを取り出してタリアに渡した。

「ガッツさま、何を取り出しますか？」

「強化体力回復剤を50個取り出したい。」

「かしこまりました。ガッツさま、カードに手を当ててください。」

そう言うと、タリアはステータスカードに手を当てながら目を閉じた。

俺がカードに触れると、次の瞬間、イベントリウインドウの中に強化体力回復剤が50個表示される。

「アイテムをご確認ください。」

「ああ、確かに受け取った。」

ステータスカードを返された俺は、念のため倉庫のシステムを確認した。

「最近はずちを離れていたもので聴いておきたいんだが、アイテムの取り出しはいつでもできるのか？」

「はい、いつでも倉庫番が常駐していますから大丈夫ですよ。」

「料金は？」ゲームでは無料だったので確認してみる。

「月に100銅いただきます。通常はお預かりしているところから月末に自動的に引き落としします。もしも、引き落としが出来ない場合は、一定期間アイテムを保管後、任意で換金していきますので注意してください。」

そうか、現実問題として貸し金庫のようなシステムになっているのだろう。

「わかった。ありがとう。」

「またのご利用をお待ちしております。」

倉庫を後にすると、俺は広場の方へ向かった。

ゲームで並んでいた生産用のNPCは露店のような形態だったが、ここではちゃんと建物の中で職人が作業しているようだ。

生産スキルをもっているプレイヤーは、そこで生産レベルで可能なアイテムを作成できたのだが、ここでもできるのだろうか？

俺は刀工のスキルだから刀鍛冶のNPCだったマセンに聞いてみよう。

「すまんが、刀を生産したいときはどうすればいい？」

「材料さえ持ってくれば作業場を貸すぜ。まあ、普通は50〜100銅ってとこだな。」

「そうか、今日はやらないがその時はたのむぜ。」

「ああ、よろしくな。」

そのうちに材料をそろえて簡単なのを生産してみたい。

まあ、生産レベルはあんまり上げていないからそれしか出来ないんだけどね。

俺からすると生産レベル上げるのはマゾに近いと思う。

刀は作ってもあまり売れないから、骨をすりつぶして骨粉にしてから研磨材を作ったりするんだけど、研磨材が高く売れないから材料として買い取ってもらうより赤字になるし、やりきれなくなっちまうんだよね。

学術スキルなら将来は回復剤やらで儲けられるからがまんできるんだろっけどなあ。

そんなことを考えながらアイテムショップで賑わう広場へ向かう。

広場の中央にはルーンを纏った巨大な岩が20mほどだろうが、高く空中に浮いている。

神の力とかで浮いているって書いてあったような気がするが。

俺は、その神秘的な光景を見上げて目を奪われながら思うのだ。

俺はラジャフに駐屯するバビリム国の衛兵ラフターだ。

このラジャフは、古くは大陸全域から巡礼者が集まる一大聖地であったが、今は首都バビリムの建都によって以前よりも静かな雰囲気を保っている。

もちろん、イシター神殿の出張所がある為、今もここを訪れる敬虔な信徒は多いので賑わいが無いわけではない。

俺はこのラジャフを守る衛兵の長として中央の広場で警備をそてい
る。

このには巨大なオーブが神々の力で中に浮かんでいるのだ。

数年前まではこの村も、南に広がる死の砂漠に飲み込まれるところ
だったんだが、このオーブの力で緑を回復することができたんだ。

その平和なラジャフに昨日から変わった雰囲気の方が現れた。

戦士職らしい冒険者に見えるが、その雰囲気と見たことが無い大型
の業物らしい両手剣からして、かなりの手練れできるヤツのようだ。

その割にはラジャフになれていないのか、キョロキョロしていたの
が気にかかっていた。

調べてみるとガッツという名前で昨日は夢屋に泊まったらしいが、
何の目的でこのラジャフに来たのだろうか？

このあたりのモンスターでは実力がとても合わないようにしか見え
ないが？

『ん、こっちに来るのは例の男だ。声をかけてみるか。』

4 ラジャフ村(3)

広場に近づくと衛兵のラフターがこちらを窺っているようだ。

衛兵はともかく、なぜ名前まで分かるのかと言うと、ゲームと同じようにターゲットすれば職種、名前が確認できるうえ、プレーヤー以外のLvまで分かるようになっていいるからだ。

これは実戦でかなり有効な能力になる。

万が一、見たことが無いモンスターに出会っても、Lvの違いで回避することが可能になるのだ。

特にボスキャラであるパワードモンスターに遭遇する時は、ある一定以上のLvのPTで挑まないと苦戦することも多いからな。

衛兵のラフターはLvを確認すると25のようだ。

ラジャフ街道側のモンスターは雑魚だし、黒のオベリスクだつて入口周辺のモンスターなら十分撃退できるLvだからこのLvで問題ないんだな。

おお、ゲームなら動かないラフターがこっちに向かってきたぞ。

「おい、その冒険者。見ない顔だが名前は何と言う。」

「ガッツだが、あんたは？」

「衛兵のラフターだ。かなり使えるようだがラジャフへは何をしに

来た？」

おいおい、いきなり職質だよ。リアルだつてされたことないのに。

まあ、見た目がガッツだから仕方ないのかもしれないけど、嘘と本当をうまく混ぜて話すか。

「実は困っている。転移魔法でここまで飛ばされたらしいが、何らかのアクシデントで自分の記憶に曖昧なところがあるんだ。このまぢもラジャフだという記憶があるのだが、自分の記憶と微妙に違う様な気がするのでうるついでいたんだがな……。」

「そうだったのか？場違いなヤツがいると思つていたんだが転移か……。高度な魔術だがアイテムとして出回っているとは聞いたことがある。」

かなり怪しい返答だったがそれほど不審に思われなかったらしい。

「まあ、これも一時的なもので、そのうち記憶も戻ってくるんじゃないかと思つてる。しばらく滞在するつもりだからよろしくな。」

「ああ、面倒を起こさないとすれば実力のある冒険者は歓迎だ。もし時間があれば依頼でも受けてくれ。」

「どんな依頼だ？」

面倒なことならごめんだぞ？

「そこに娘がいるんだが、村長の娘でルエリアという。モンスター絡みで冒険者頼みたいことがあるといつていた。一度話を聞いてや

ってもらえないか？」

おお、初クエストかな？ラフター経由で来るとは考えていなかったけどね。

「いいだろう。ただし、受けるのは村の様子を一通り見てからになるぜ？」

「問題ない。たのんだぞ。」

つい依頼の話を聞くことにしたが、これには理由がある。

記憶では、そのクエストはかなり初期のLvが低いクエストだったはずだ。

それに、おそらく衛兵の紹介で村長の娘の依頼を受ければ、ラジャフで信用が付くはずだというもくろみもある。

田舎つてのは流れ者には敏感なものだし、お偉いさんの影響つてものは良くも悪くも大きいのだ。

俺は広場の中にいる村長の娘、ルエリアのところへ行って話を聞くことにした。

そうやって会いに行ったルエリアは、グラフィックで見た素朴な顔ではなく、見た目は高校生ぐらいの少しきつめの美人さんだった。

「ラフターに紹介された冒険者のガッツだ。モンスター絡みで依頼があると聞いたんだが？」

「村長の娘のルエリアよ。実は最近、村の周りのモンスターが増えてきて物騒になって困っているの。」

「村のすぐ近くにはモンスターがそれほどいないようだが？」

「村はオーブの加護があるためか問題ないわ。この村はバビリムとの交易で成り立っているんだけど、最近『塔』の周りに魔物が徘徊するようになって、商人たちが襲われる事件が多発しているのよ。」

ドルアーガの塔の影響でモンスターがやはり活性化しているらしいな。

「ついこの間も魔物に隊商の積荷が襲われて荷が奪われてしまったんだけど、それを探ってきてくれないかしら。勿論、報酬は用意するわ。荷物10箱につき100銅よ。どうかしら、やってくれる？」

ほう、実際に狩りをする手間がかかることが分かったが、報酬にも上昇ということで反映されているようだ。

「問題ない。ただし、ここは来たばかりなので一通りアイテムショップを覗いて準備してになる。明日からでもいいか？」

「いいわよ。そう言えば、商隊を襲ったのはスモールウイングらしいから、あいつらを中心に倒してみて。」

「分かった。荷物はどこに届ければいい？」

「私はこの広場にいることが多いけど、いない時には西側に村長の家があるからそこへ届けてくれるかしら？」

「おう、村長の家だな。」

こうして俺はこの世界で初めての依頼「クエストを受けることになった。」

しかし、初期のクエストだから記憶に残ってなかったけど、ルエリアってこんなキャラだったんだ。

初めてのクエストに少しだけ気分が上がった俺は武器の手入れが出来るところを探すことにした。

戦士としては武器の切れ味は死活問題だから大切なのだ。

剣が看板にかいてある武器商人の店へ行ってみることにした。

店に入ると剣の他にも、メイスや魔法の杖まで扱っている。

ただし、担当がいるらしくソルジャーやスカウトの前衛戦士系、ドルイドやメイジの後衛魔術系と者達と商談をしていた。

俺は剣を扱っているカウンターへ向かった。

「いらっしやい。お客さん、どんな種類の武器をお探しですが？」

「そのうちに剣を砥ぎに出すつもりなんだが、ここで頼めるか？」

「大丈夫ですよ。それに、このラジャフならほとんどのアイテムシヨップで受付できますよ。実際に剣を研ぐのはマセン親方のところですからね。」

「その親方なら少し前に会ったぜ。」

「そうですね。村の約束事ですから法外な値段を取られることもありませんし、安心して依頼してください。」

「分かった。」

ゲームをしている時は雑貨商店で修理できることが不思議だったけど、そういう便利なシステムなんだ。

それとは別に俺は剣を物色することにした。

今持っている剣は、最低でもLv30以上の武器であるためラジャフ周辺で使うには威力が大きすぎるのだ。

Lvの高い剣で低Lvのモンスターを狩っても切れ味は落ちないし、それを周りに不審がられても困るといふ配慮もある。

並んでいる中でも上等な剣を手に取り、装備でどの程度のものか確認したうえで聞いてみる。

「この両手剣はどんな代物だ？」

「この店で一番の両手剣、ブラックファルクスです。黒い刀身は高温で焼かれておりますので通常の鉄製の剣よりも丈夫ですよ。」

Lv20以上が装備できる両手剣で、このあたりの雑魚を片付けるには十分な剣だ。

「中々の剣だな、いくらになる？」

「4銀になります。」

記憶している店頭価格と同じようだ。

「そうか、この剣を1本貰おう。」

「ありがとうございます。最初のメンテナンスは無料でやらせていただきますのでお持ちください。」

「それは助かるな。その時は頼むよ。」

そう言っただ俺はバッグから4銀を払って武器を受け取ると店を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525y/>

ドルアーガの冒険

2011年11月25日23時53分発行